

もくじ 千住の酒合戦に由来する掛け軸 谷文晁「酒宴図」…P1 アヤセカメラコレクション2 綾瀬 駅のあゆみと路線の変化…P3 足立二丁目庚申祭・二〇二五…P4

足立史談

第696号

2026年2月15日
足立区立郷土博物館内
足立史談編集局
〒120-0001
東京都足立区大谷田5-20-1
TEL 03-3620-9393
FAX 03-5697-6562

新収蔵資料紹介

千住の酒合戦に由来する掛け軸 谷文晁「酒宴図」

小林 優

郷土博物館では、酒井抱一や谷文晁といった地域ゆかりの絵師たちに対する調査を続けています。その調査は、地域の各家々の伝来資料や記録に対する検証を基本としつつ、各地に所在する美術作品の情報を広く持つ古美術商の方々からも適宜情報を集め、知られざる地域ゆかりの作品の探索も行っています。そして令和五年（二〇二三）、古美術商の保管する作品を調査する過程で、千住の酒合戦に由来する谷文晁の作品「酒宴図」（図1）が新たに発見され、令和七年、郷土博物館の所蔵となりました。そこで今回は、この新発見の地域ゆかりの美術作品



図1 谷文晁「酒宴図」
文化14年(1817)以降 紙本淡彩
当館蔵

「酒宴図」について紹介します。 ■「酒宴図」の概要 「酒宴図」は、縦一三四・二センチ、横三一・〇センチの画面に、多くの人々が振る舞われる酒を飲んで楽しむ様子を描いた一幅の掛け軸です。画面右上に高い台に乗せられた大きな酒樽があり、呑み口（酒を出すための口）から流れ出た大量の酒がその下の大きな釜で温められて、釜の側に立つ人物が客の盃に柄杓で注いでいます。そして、温めた酒を湯桶（ゆとう）に入れて大勢の客に振る舞い、客たちがその酒を楽しむ様子が描かれ、最下段では場面が変わって、馬を引いてやってきた人物と、酒宴に誘っているのか、それを迎えて右側を指さす人物が描かれています。 不思議な酒樽から注がれ続ける酒を楽しむ人々の群像図であり、その左上にはこの図に合わせた狂歌「酒呑めば いつも心は春めきて 借金取も鶯の聲」が文晁の筆で記され、 「文晁醉書（朱文重郭方印「画齋齋印」）」の署名が付されています。 なお、この「酒呑めば」の狂歌は文晁の創作によるものではなく、古典落語「穴どろ」にも登場するなど江戸時代当時から広く知られていた狂歌であり、本図の内容に適合するものとして文晁が選定して、画賛として添えたものと見られます。 また本作では、狂歌の下に記された署名の他にもう一か所、酒樽の表面に「文」の字と、「晁（ちよ）」の音と通じた「蝶」の絵を描くことで「文晁」とする署名（図2）が記されており、文晁の洒落と遊び心を垣間見せます。 ■千住の酒合戦との関係 一見するとユーモラスな酒宴の風景を描いた一図ですが、本図には元となる画像が存在します。それが、文化十二年（一八一五）に千住宿で行われた千住の酒合戦の記録絵巻「高陽闘飲図巻」（こうようとういんずかん）中



図2 酒樽に記された「文」と蝶の絵による署名部分

に描かれた図像です。

千住の酒合戦は、千住宿の飛脚問屋、中屋六右衛門の還暦を祝い、千住の文人である坂川屋鯉隠が世話人となって開催された催事です。近隣の酒豪を募って酒量を競い、併せて千住の人々と親しい交友を結んでいた酒井抱一・亀田鵬斎・谷文晁といった著名な文人たちが賓客として招かれ、会の様子を観戦しました。そしてその終了後、招かれた文人たちが詩文や画によって酒合戦の次第を書き、一巻の記録絵巻として構成されたのが「高陽闘飲図巻」です。

この「高陽闘飲図巻」の中で、文晁は娘婿の一世谷文一と共に酒合戦全体の様子を記録画「酒戦図」として描いています。「酒戦図」は、酒豪たちが飲み競べをする会場の様子から、棧敷席で抱一ら賓客がそれを見物する姿を描き、続いて酒豪に饗する料理を準備する台所の様子といった裏方の様子へと移って、最後に飲み競べ参加者以外の多くの人々に

も酒が振る舞われる様子までを描いています。

これに対し、今回紹介する「酒宴図」を見ると、右上の酒樽こそ新たに加えられたものであるものの、酒を温める釜の部分から、それを柄杓で客に注ぐ人物、湯桶で酒を配り、その酒を楽しむ人々の一群と、馬を連れた人物まで、「酒戦図」の後半部分(図3)と一致することがわかります。すなわち「酒宴図」は、「酒戦図」の図像をそのまま引用しつつ、本来は絵巻の横構図であった図像を掛け軸の縦構図へと再構成して描かれた、「酒戦図」の派生的作品であると言えるのです。

「高陽闘飲図巻」は、文化十四年(一一八七)に行われた第二回の酒合戦(会場は千住仲町の源長寺)と併催された新書画展観会でお披露目され、その後、「酒戦図」前半部分のみを取り出した一枚摺の摺物も含めて、複数の異本や模本が作成されたことがわかっていきます。しかし、多くの異本・模本の図像が「酒戦図」前半の会場での飲み競べの情景を欠かすことなく、千住の酒合戦の記録画としての役割を維持しているのに対し、本図「酒宴図」は、その前半部分をあえて除き、人々が振る舞われる酒を楽しむ後半部分のみを取り出して

再構成することで、本来の図像から酒合戦の記録画的側面を排し、特定の出来事の図ではない、より広義の「酒宴」の図像へと変化させていると言えます。

そしてこれは、千住の酒合戦をきっかけに形作られた図像が、文晁の中で「酒宴」をイメージする素材として定着し、以降の作画に活用されていたことを物語っています。「酒宴図」はまさに、文晁による千住の酒合戦の観戦と、記録画「酒戦図」の制作という経験の先に描かれた、地域の歴史・文化と深い繋がりを持つ一作と言えるのです。

「酒宴図」は、郷土博物館令和七年度企画展「千住・足立の文化遺産展 後期 狩野派・谷派 絵師たちの残した模写・絵手本」(二月十四日～四月十二日)で初公開します。そして、こうした地域ゆかりの美術作品は、未だ各地で多く眠っていると考えられ、郷土博物館では今後も、調査を継続していきます。

(郷土博物館学芸員)

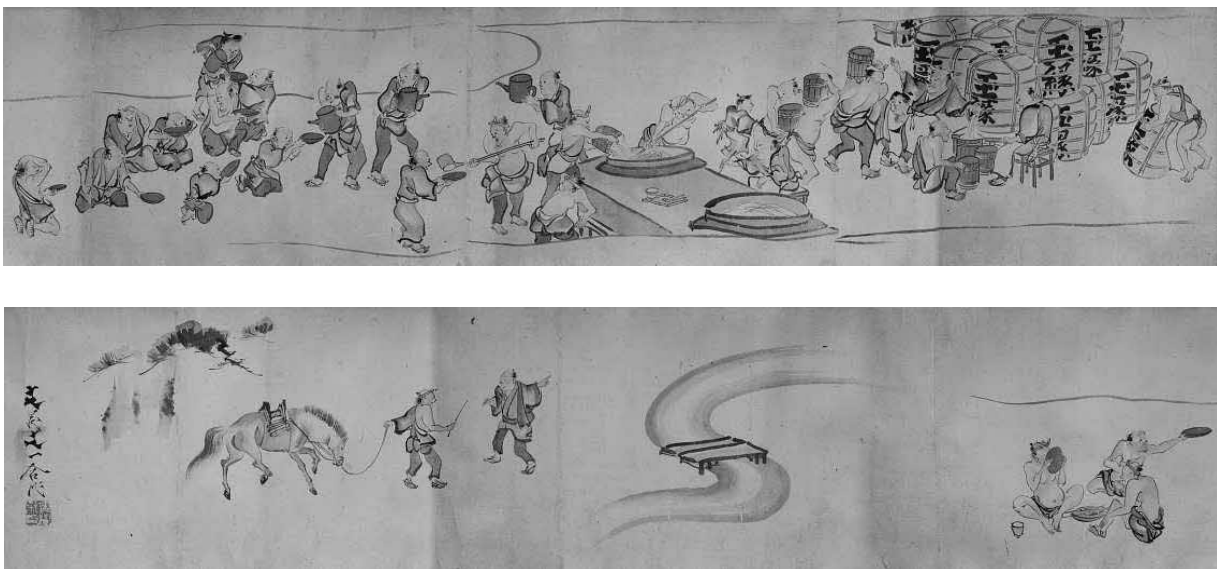


図3 「高陽闘飲図巻」より谷文晁・一世谷文一「酒戦図」(後半部分)
文化十四年(一一八七)頃 紙本着色 個人蔵



伊藤 早穂子

アヤセカメラ・コレクション2
綾瀬駅のあゆみと
路線の変化

足立史談六九二号にて、アヤセカメラ（綾瀬三一―一〇）さんよりご寄贈いただいた写真資料「アヤセ



開業初日の旧綾瀬駅（江北高校提供）昭和18年（1943）



旧綾瀬駅舎（吉田英雄氏提供）撮影年不明

カメラ・コレクション」を紹介しました。今回は、綾瀬駅の変化を捉えた写真をピックアップし、鉄道関係の雑誌なども参照しながら、綾瀬駅のあゆみや、期待された役割を辿っていきます。

■綾瀬駅の開業

今日、綾瀬駅にはJR常磐線各駅停車と東京メトロ千代田線が乗り入れ、令和六年時点での乗降者数は一日平均三八四、五五四人と、東京メ

トロが公表する、駅別乗降者数ランキングでは渋谷駅・池袋駅に次ぐ第三位です（「各駅の乗降人員ランキング」東京メトロホームページより、二〇二六年一月二十一日閲覧）。そんな綾瀬駅の開業は、昭和十八年（一九四三）四月一日に遡ります。綾瀬駅開業に深く関わったのが、都立江北高校の前身である、東京府立第十一中学校です。第十一中学は、昭和十三年（一九三八）に東京市赤

坂にて開校し、昭和十五年に現在の西綾瀬（当時は五兵衛町）の地に移転となりました。この頃、学校の最寄り駅は東武線五反野駅でしたが、より学校に近接した新駅の開業を求め、大森乙五郎校長・小倉隆教頭が中心となり、二八七回にわたって鉄道省へ陳情を行い、土地の無償寄付を求めて地元有力者を訪問するなど尽力し、物資が不足する戦時体制下にもかかわらず開業へとこぎつけた経緯があります（足立区編 一九七九『足立の今昔』、足立区立郷土博物館編 一九九七『足立風土記稿 地区編6 綾瀬』）。

開業当時は国鉄常磐緩行線のみで乗り入れで、駅舎・線路は地上にありました。

■直通運転の開始と高架化

昭和三十七年（一九六二）、帝都高速度交通営団（現・東京メトロ）による綾瀬―代々木上原を結ぶ地下鉄九号線（のちの千代田線）の建設と、併せて綾瀬駅において国鉄常磐線と、代々木上原駅において小田急線と直通運転を行うことが決定されました（森口幸雄 一九六七「常磐線・綾瀬―松戸間線増工事」『交通技術』二六七号）。

当時、常磐線沿線では市街地化が急速に進む一方で、鉄道は都心まで直通していませんために乗換駅の混雑が深刻でした。直通運転は、この状

況を踏まえて輸送力強化と混雑緩和を意図したもので、常磐線の複々線化（上下線各二本の合計四本にする）と併せて計画されました。

この折に、綾瀬駅は亀有方面に二〇メートル移転して現在と同じ立地となり、高架化工事も行われまし



高架化工事中の仮綾瀬駅舎
(室井氏提供) 昭和44年 (1969)



綾瀬駅の高架化工事
(室井氏提供) 撮影年不明

た。昭和四十一年（一九六六）に着工し、昭和四十七年に綾瀬一代々木公園間が、昭和五十三年（一九七八）に代々木公園一代々木上原間が開通し、実に十二年の歳月をかけて全通に至りました。その後、昭和五十四年には北綾瀬駅が開業し、現在の東京メトロ千代田線と同じ路線となりました。

■地下鉄への期待

今日、地下鉄はあつて当然のものなのですが、高度経済成長期において、地下鉄は道路の渋滞に巻き込まれるリスクもない、大量・高速輸送の要請にこたえる交通手段として大いに期待されたようです。とりわけ、常磐線・小田急線との直通運転を行う千代田線は、首都圏の東北方面と西南方面を取り結ぶ「交通の大幹線」とみなされ、開業が心待ちにされていました（館野豊・卜部一誠 一九六九「開業迫る千代田線〈営団地下鉄9号線〉」『交通技術』二九六号）。

アヤセカメラ・コレクションの写真は、人々の様々なニーズにこたえて生み出され、姿を変えてきた鉄道のあゆみを今日に伝えています。

(郷土博物館専門員)

足立二丁目庚申祭
二〇二五

昨年十二月二十一日、足立二丁目にて庚申祭が行われました。この庚申祭は、戦前に行われていた行事を、一昨年（令和六年）に新たな形で復活させたものです。

当日は、午後〇時五〇分頃から始まったお囃子を合図に徐々に参加者が集まり始め、西之宮稻荷神社の神職の到着を待って、十三時ちょうどに庚申祭が始まりました。初めは足立二丁目三十一番地の庚申塔で、神職による祝詞の

奏上と参加者による玉串奉納が行われます。それが済むと、お囃子の太鼓や長机を自転車の荷台やリヤカーに積み込み、二丁目三十六番地の庚申塔へ場所を移し、二度目の祝詞奏上と玉串奉納を行いました。十三時四十分頃には終了し、十四時頃からは



移動して二か所の庚申塔で祭事が行われる。

(郷土博物館)

東町会会館で直会が開かれました。庚申祭を主催する足立東町会では、廃品回収や毎月二十五日の総会など、月に三回ほど活動を行い、夏場には消毒剤の散布も行っています。また、お囃子を奏でた五反野祭囃子保存会は、毎週土曜日に西宮神社で活動を行っています。メンバーは全部で十五名ですが、今回はそのうち五名が参加しました。

なお、庚申祭復活の経緯や、庚申塔の建立地については、史談六八四号（二〇二五年二月号）に詳しいので、あわせてご覧ください。